

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



産業革命以後、人類は、それまで人力または畜力、あるいはせいぜいわずかばかりの風力、水力でやっていた農業や工業の営みを石油や石炭に依存するようになった。1950年代以降は、それに原子力が加わった。多くの人が食べるための営みから解放され、余った時間とエネルギーを他の活動に回せるようになった。

今や日本では、多くの国民が食べるために使う時間とエネルギーを極小にし、耕すことはおろか、食材の買いつけ、調理など、食にかかわる手間のほとんどを他人任せにしてしまっている。そして、そうした選択のゆえに、日本は戦後短期間で奇跡的な復興を遂げ、国際社会での

「他人任せ」の現代

食のための労働見直そう

今の立場を築き上げることができたのである。

しかし一方で、その致命的な弊害が顕在化しつつある。その最たるものは、働かなくても食えるかのような幻想を社会全体が持ち始めていることだ。高度に加工されたインスタント食品やファストフードが家庭の食卓にまで持ち込まれ、子どもたちの世代は食の素材も、調理の方

めの労働を石油に肩代わりさせてきただけに、そのこと自体を忘れてしまっている。

食するための労働から解放された私たちは、その労働に使った時間とエネルギーをどこに使うようになったのか。日本人の多くが老若男女を問わず都市生活者として働く自由を謳歌できるようになった。時間ができたことで、娯楽という欲望は際限な

労働不足は生活習慣病を誘発し医療費の負担を増加させている。多くの人がびとが、ジムに通ったり運動するなど涙ぐましい努力を余儀なくされているが、それがまたエネルギーの浪費を誘引している。

そこで私は一つ提案したい。月1回、自炊の日を作ろう。その日は、男も女も、皆がなるたけ自分で調理して食べる。核家族では無駄が多いから、地域の取り組みにするのもよい。ジム

法さえも知らない。

原発事故などで電力危機が広がると、家庭での調理に矛先を向けるような議論まで登場するありさまだ。生産の現場でも同じことが言える。耕し、田植えをし、草をとるといった作業のひとつひとつが忘れ去られようとしている。私たちは、ほんらい自分たちが担ってきた食のた

く広がり、ついにはインターネットの登場で一人一人が発信者になれるようになった。私たちははいまや、働かずして食べているのである。

労働の軽減によって、今度は摂取カロリーの過剰に悩まされるようになった。今や日本人の1人当たり摂取カロリーの70年を境に減り始めている。同時に、

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。